

世にも奇妙な
悪辣姫の物語

1

アレンデール

ディノス王国モレル辺境伯家当主。
戦場では鬼神のごとき戦いを繰り
広げる豪傑。
伯父と伯母が爵位を継がなかった
ため、辺境伯になったが、その椅
子には興味がない。

ヘレナ

バトレイア王国第四王女で
ある、悪辣姫。
モレル辺境伯夫人としてア
レンデールへ嫁ぐ。家族の
愛に憧れを抱いているが、
それ以外は期待していない。

アールシュ

ディノス王国へ外交
しにきた、バッドウ
ーラ帝国第四皇子。
朗らかに人懐っこい
仮面の下には腹黒い
一面も……？

マリウス

バトレイア王国王太子で、
ヘレナの双子の兄。
唯一の王子として期待を
一身に背負うが、その重
責に身動きが取れず、雁
字搦めになっている。

サマンサ

バトレイア王国第三王女。
絶世の美女だが、自身の
能力は平凡。
家族の歪みに気がついて
いたが、何も行動するこ
とはできず、隣国のライ
ラトネ王国へ嫁いだ。

イザヤ

アレンデルの専属執事。
腕っぷしはからっきしだが、
人に取り入るのが上手い。
書類仕事の苦手なアレンデ
ールをサポートしている。

アンナ

モレル辺境伯夫人になった
ヘレナへ付けられた侍女。
元々諜報担当だったが、ヘ
レナの侍女になって以降、
護衛としても働いている。

世にも奇妙な 悪辣姫の物語

プロローグ	悪辣な姫	006
第一章	辺境伯は噂の花嫁に戸惑いを隠せない	011
幕間	あの子の好きなもの	030
第二章	幸せな離れ暮らし	039
幕間	若き辺境伯は妻を愛でたくて途方に暮れる	055
第三章	小さなスマイレの願い事	099
幕間	国王は王妃の言葉でそれを知る	110
幕間	三番目の姫	146
幕間	双子の兄は妹のことを	153
第四章	悪辣姫は立ち向かう	161
幕間	ディノスの王妃は見定める	170
幕間	王は知っているようで知らない	218
幕間	異国で見つけた良き友よ!	224
第五章	忍び寄る過去からの悪意	229
幕間	異国の従者は思いもかけない話を拾う	234
エピローグ		281
番外編	隣国の王太子は恩を売りたい	286
番外編	アレンデールは知っている	295
		300



プロローグ

ヘレナ・パトレイア。

パトレイア王国、第四王女。王太子の双子の妹。末の姫君。

そして——姿を見た者がほとんどいないのに、我が儘な悪辣姫としてその名を馳せる。それが、私だ。

両親である国王と王妃の下には、私他に三人の姫と王子が一人。

一番上の姉トーラは一昨年、この国の公爵家に嫁いだ。

二番目の姉ミネアは昨年、この国の騎士団長に嫁いだ。

三番目の姉サマンサは今年の初めに隣国に嫁ぎ、王太子妃となった。

双子の兄である唯一の王子マリウスは、王太子として大切にされている。

そして、今度は私の番。十八才の誕生日を先日迎え、めでたく婚儀が決まった。

知らされたのは、昨年のことだ。成人したら嫁ぐのだと。

嫁ぎ先は隣国のデイノス王国だと、ただそれだけ告げられた。

三番目の姉とは別の、パトレイアを挟んで逆隣にある国。

私に拒否権などあるわけもないので、ただ『はい』と答えた。

婚儀を行うと定められた日の半年前に、私は嫁ぐ相手が誰なのかようやく知らされた。

相手はディノス王国の將軍の一人で、パトレイアとの国境に隣接するモレル辺境伯だった。

王族ではない相手に嫁がされるとわかってても、私の感情は特に動くこともなかった。

家族は、嘆いていた。格下扱いされて悔しいからかと思ったが、違うらしい。

私に拒否権を与えないのに何故か嘆くその姿は滑稽だったけれど、やはり何も感じなかった。

死神のように恐ろしい、そんな噂のある辺境伯に嫁ぐだなんて可哀想だと三番目の姉から哀れむ内容の手紙が届いたが、果たしてそうだろうか？

私の意見は違う。むしろ哀れなのは相手ではなからうか。

参列者が誰一人いない結婚式。門出を祝う人など、誰もいない。

人々の幸いが満ちる場であるはずの教会だというのに、その雰囲気はまるでお葬式のようにすらある。

ただただ、場はしんと静まりかえるばかり。

そしてその中でどこか手持ち無沙汰な様子の神父と、花嫁らしく純白のドレスを纏った私は静かに新郎の到着を待ち侘びていた。

(……本当に滑稽だわ)

王族の末姫が纏うに相応しい豪華なドレス。しきたりに則り新婦側が用意した。

そしてサファイアで作られた装飾品の一式。見事なパリエールは新郎側が準備したものだけれど、私には分不相応なほどに美しい代物だ。

けれどこの結婚は、いくら美しく調べようともただの政略的なものにしか過ぎない。

誰一人として喜べない結婚ならば、いっそ平服でも良かったのだろうに。

着飾るからこそ余計に滑稽で、哀れで、寂しかった。

厚いベールの下で、そんなことを思う。

(辺境伯も、可哀想な人ね)

私みたいな悪名高い女を、花嫁として押し付けられるだなんて。

巷ちまたに悪名を轟とどろかす「悪辣姫」は豪奢な暮らしを好み、弱き者を虐げ、我が儘放題。

そんな噂を耳にして、新郎も今頃は戦々恐々としているのかもしれない。

いずれにしても私と同じく彼もまたこの結婚に異を唱えることは許されないだろう。

(でなければ決して受け入れるはずがないもの)

噂に聞くまだ会ったこともない夫には、恋人がいるらしい。

隣国の王女を妻に迎えねばならず、彼らはかなり辛い思いをしていると耳にした。

(私がこの結婚を望んだわけではないけれど、なんとも哀れな話だわ)

貴族として、領地を治める者として、断ることが許されない縁談。

だからできるだけ早く、お役目を果たして……彼を自由にしてあげなくては。

それが、私にできるせめてものことに違いないから。

押し付けられた悪辣姫。

断れなかつた恋人持ちの辺境伯。

いずれにせよ、王家の血を持つ子どもは両国にとつて必要だ。

(子が生せず三年待つての離縁になるのか、あるいは一切の肉体関係を持たずに白い結婚を買い

ての離縁か……それとも)

「新郎が到着なさいました!」

聞こえてきたその言葉に、思考の海に沈みかけていた意識が浮上する。

礼装と言うには些ちとか厳めしい装いをした長身の男性が、無言で私の横に立った。

私は厚いベールの下から隣に立つ新郎の姿を垣間見る。横顔しか見えない。

綺麗な黒髪を撫でつけるようにしたこの人が、私の夫となるのか。

教会のステンドグラスから注ぐ光に照らされた切れ長な紺青の瞳が、とても綺麗。

だけど彼はちりりとも私を見なかった。

彼がこの結婚をどう受け止めているのか、よくわかる態度だった。

(どんな戦いでも引かず、死神のような戦い方をする……だったかしら)

夫のことなのに、事前にはほとんど教えてもらっていない自分に笑ってしまいそうだ。

聞けば逃げ出すとも思ったのか、それとも拒否をさせないためだったのか。

(彼の名前は確か……)

「それではデイノス王国のアレンデル・モレル辺境伯閣下とパトレイア王国のヘレナ姫、お二人

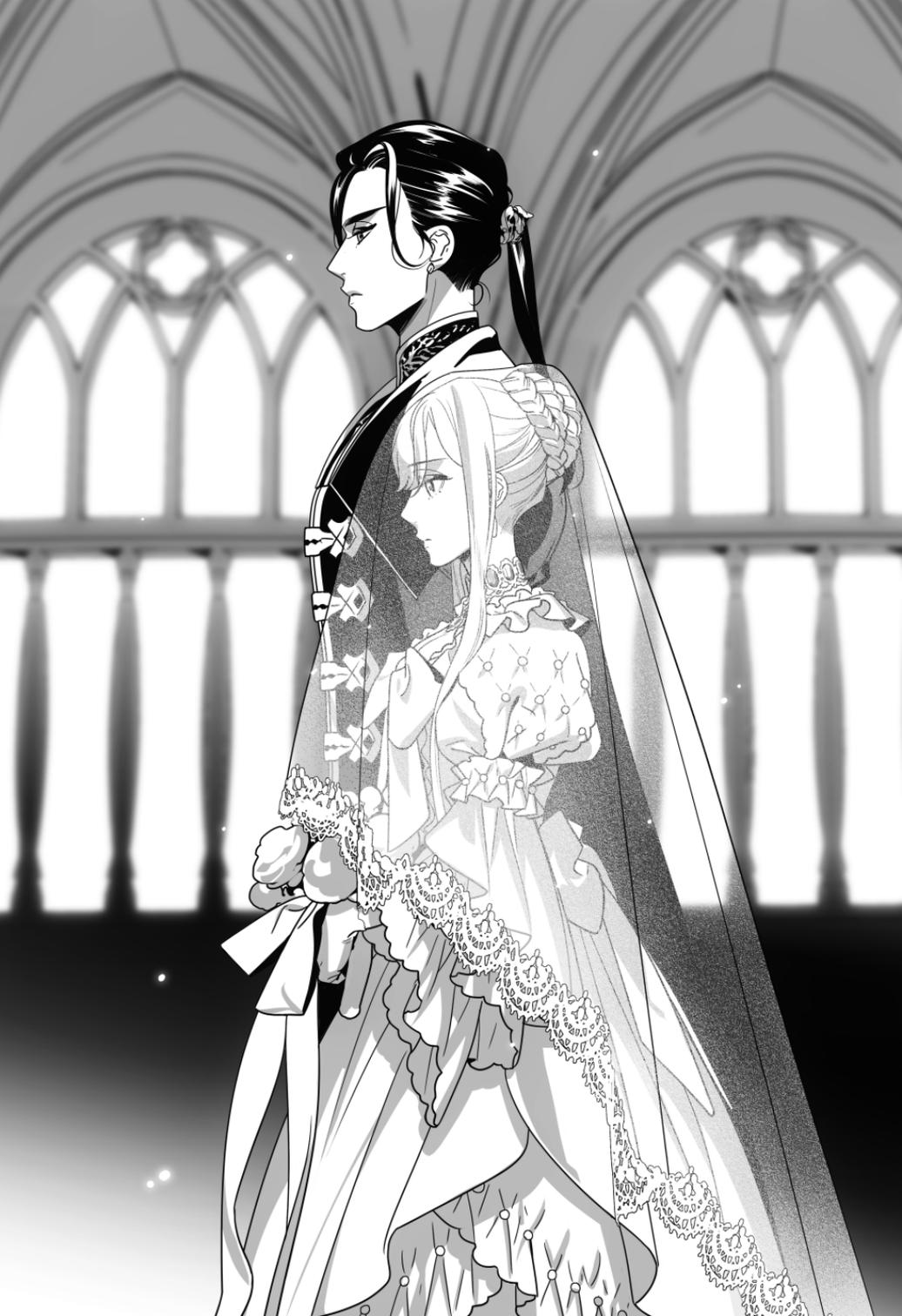
の成婚がここに相成ったことを神の御前にて誓わせていただきます」

神父の声に『ああ、そんな名前だった』と他人事のように思った。

でもきつと彼の名前を呼ぶことはないのだろう。

家族はこれまで私をこれっぽっちも見なかった。

だから彼も私を見ることなんてないのだろう。



きつと、これからも、誰からも。
ずつと、ずつと。



第一章 悪辣な姫

私が生まれた時、国は大いに沸いたと聞いた。
双子の兄、マリウスの誕生を祝うために。

パトレイアの王には一人の妻と、五人の子どもがいる。

私の両親である国王夫妻は、決して悪い人たちではなかった。

ただ、生まれた男児に興味が行ってしまい、その片割れである私に対して無関心なだけ。

それは何故か？

パトレイア王家はなかなか男児に恵まれない家系だからだ。

四人目にして男児が生まれるのは早いくらいなのだという。

なんせ、数代前の王は男児欲しさに次々と妃を迎え、王子が誕生するまでに姫が二十人以上誕生した……なんて歴史書に書かれているほどだ。

さすがにそれは目に余る行いとされ、それ以降はパトレイア王国も一夫一妻制度をとっている。

あまりに子ができない場合に限り、側室を認めるという形で。

だから双子の兄、マリウスが生まれるまでの間、おそらく妃殿下にはとてつもない重圧があったのではないかしら。

以前侍女たちが、妃殿下は男児が多い家系だからという理由で王妃に選ばれた……なんて話していたのを小耳に挟んだから、きつとそうなのだと思う。

それだけに、周囲からの期待に応えようと日々大変だったであろうことは想像に難くない。そんな中で待望の男児が誕生したのだ。誰もが大喜びした。

(私というおまけつきでだったけれど)

男児の誕生に沸く中で、私の存在はどこまで行ってもおまけだった。

何をするにも兄が優先で、誕生日を祝う場でも兄の名前だけ呼ばれるなんて当たり前。

私はお情けでちんまりとその名がどこかに記されておしまい。いつものことだ。

加えて運が悪いことに、パトレイア王国では昔から『双子は不吉』という伝承がある。

あくまでそれは言い伝えでしかないと今では鼻で笑われる話だけれど、やはり縁起がよくないと見る人も少なくない。

そんな私が双子の、さらに女児とくれば、厄介者同然でも仕方なかったのだろう。

それでも国王夫妻が平等に愛を注いでくれたら話が違った可能性もあったかもしれない。

けれど待望の男児を前に、平等を心がけるのはさぞや難しかったのだと思う。

気がつけば、侍女たちも私を軽んじるようになった。

侍女から『王子つきになりたかったのにおまけの王女のところだなんて！』と言われた時には彼女たちに申し訳ない気持ちでいっぱいだったけれど、今思えばあれはただの八つ当たりよね。

(マリウスに言われるまで気づかなかったなんて、私もどれだけ鈍かったのかしら)

自分では気づかなかったけど、双子の兄がそれを咎めてくれたからそうなのだと知った。

それでも、その侍女たちは嚴重注意を受けただけだった。それが私の価値だった。

妃殿下の『男児の誕生に侍女たちも浮かれすぎていた』『王女たるもの、寛大な心で侍女の失敗を許すことが時には必要』という言葉に、周囲も同調した。

そう論されればそうなのかと私には頷くしかできないではないか。

注意を受ければ、彼女たちもきっと変わってくれる。

両陛下も私を気に掛けてくれるかもしれない。

そういう期待があった。でもそれは間違いだった。

(要らない子だった、ただそれだけの話……)

不幸中の幸いは、双子の兄であるマリウスだけは私をいつも気に掛けてくれたことだろうか。

それでもそんな兄もいつしか、王太子教育が忙しくなって……私とほとんど顔を合わせなくなったのだけだ。

トーラ姉様とミネア姉様も、いつも忙しかった。

顔を合わせれば笑顔を向けてくれたから、嫌われてはいなかったと思う。だけれど、彼女たちの

関心もまたマリウスに向けられていた。

サマンサ姉様は……正直、よくわからない。

同情的なようでいて、実は私のことを嫌っていたのかもしれない。避けられていたように思う。

(私は、誰からも必要とされない王女だった)

それだけは、確かだ。

だからこそ家族の誰からも関心が寄せられることはなかったし、彼らは家族である私の言葉よりも、私の周囲に配置した人間の言葉を信じた。

我が儘で、散財癖があつて、癩癩かんしやく持ちだから気に入らないことがあるとすぐに使用人を辞めさせる、物にも人にも当たり散らして怪我を負わせるなど日常茶飯事といった悪辣な振る舞いの姫。気がつけば、私の周りには誰もいなくなつていた。

最初の頃はまだよかつた。

おまけの姫とはいえ、王族としてそれなりに遇されていたと思う。

侍女がいて、豪華な部屋と教育が用意され、三食与えられることは当然だつた。

でも気がつけばそこに必ず悪意が存在した。

王族の誰もが気に掛けることのない姫。それが私の価値であると人々は判断したのだ。

軽んじられても、仕方ない状況だつたのだと思う。

そしてその窮状を訴えれば子どもが我が儘だ、癩癩だと言われ、改善を求め行動に出ればしつけと称した体罰が待つていた。

『ヘレナ』

国王陛下が私の元に足を運んでくれた時、救われたと思つたのはいつのことだつたらう。

私が両親を国王夫妻としてしか見ることでできなくなつたのは、いつだつた？

あの人たちの目には、私は娘ではなく王女としてしか映つていなかったのだらうか？

答えは今も、わからない。

『だめだろう。どうしてお前は……』

覚えているのはいつだって、私に対して落胆を表すようなその表情と声ばかり。マリウスに向けられる温かい目も、抱き上げる手も、励まし褒めるその言葉も。私は何一つ、知らない。

ただ、それは始まりに過ぎなかったのだと思う。

いくつもの悪意が私の上を過ぎ去った。

何を訴えても誰もわかってくれないならば、心を殺せばいいと悟った。

(期待しても、良くないから)

期待したらただ傷つくのなら、何も願わなければいい。

どうせ何をしたって私は嫌われるのだ。

何故かなんて知ろうとも思わなかった。諦めた。

そうして月日が流れて、私の行いは何をしても悪行としてしか受け止められないようになり、侍女の数が減り、社交の場に出ることもなく、ただただ無為に時間を潰す日々が始まった。

親しくした教師もいたし、侍女もいた。

ただど彼らはいつの間にか遠ざけられてしまっていた。

(それもこれも私が悪かったんだろうか)

どうして、とは思う。

誰に聞いたらいいのかわからなかった。

陛下や妃殿下に訴えれば良かったのだろうか？

それとも王太子に？ 姉姫たちに？

一度も、私の言葉をマトモに聞いてくれたことがない人たちに何を問えば良いのだろうか。彼らにとつては、私はただただ、手のかかる、末っ子に過ぎないのだ。

(……どうしようもないわね)

もうその頃には特に何かを思うことはなかった。

ただ、私に求められているのは、何もしいないことだけ、だと悟っていた。

息を潜め、邪魔にならないように生きればよい。

私に求められているのは、そういうことだ。

そうして過ごしていた日々の中で、国同士の争いが起きたということを耳にした。

やはり特に思うことはなかった。私に求められることはないと知っていたから。

おまけの私は意見を求められることは元より、社交界で活動して人々の不安を宥め、慈善活動をするなどといった行動なんて、誰にも期待されていないのだ。

ただ、漏れ聞こえてくる侍女たちの会話のおかげで、何があつたかは大体理解できた。

隣国であるデイノス王国との国境沿いで争いが起きたこと。

そして一触即発の中、先に手を出してしまったのが我が国、パトレイアであつたこと。

侵略にあたるとしてデイノス王国の兵士と戦いとなり、それを鎮静するのにデイノス王国のとある騎士が大活躍したこと。

その姿が黒髪に黒い鎧だったことから、まるで死神のようだという話だった。

『小競り合いだったとしても数で押し切っていたはずのパトレイア軍をあっという間に一人でなぎ倒すようにして退けたんですって!』

『まあ、なんて恐ろしい!』

『見た目も冷徹そのもので、目が合うとそれだけで身が竦んでしまつて剣を構えることもままならなくなつてしまふとか……』

『わたしも聞いたわ、まさに宗教画に描かれる死神のような姿だったとか……』

『襦袢ほろきれのような外套を身に纏つて、身の丈はあろうかという巨大な剣を振るうとか』

聞かえてきた話はそんな突拍子もないものばかり。

おしゃべりな侍女たちが庭先で歓談するその声が、城の外れにある私の部屋にはよく届くのだ。彼女たちは一切そのことに気がついていないようだけれど。

(……まあ、教えてあげる理由もないものね)

聞かえてくる彼女たちの噂話で、私は外の様子を知る。

知つたところで何ができるわけではないけれど、知らないよりはずっと面白い。

侍女たちはどこから話を聞いてくるのかわからないが、いろいろなことを知つているのだ。

それこそ、やれ城の中にはかつて王に手打ちにされた側妃の亡霊が夜な夜な現れてむせび泣くだとか、やれ離宮の物置部屋に安置されている割れた鏡を覗き込むと未来の姿が見えるだとか、そんな怪しげな話題から、大臣たちが機嫌悪く日々会議をしているなんて有用な話まで。

(……パトレイア王国は斜陽の国、だったかしら)

かつてはこの大陸で、横並びの三つの国は「三つ子の真珠」と呼ばれ切磋琢磨する仲であつたは

ずなのに。いつしか不仲になったかと思えば、国力に差が生まれてしまった。

(それにしても、死神みたい、いな騎士、か……)

いくら国力差があるからといって、数に勝る軍を押し負かすというのはとても凄いことのように思えた。戦場のことも、騎士のことも、私にはよくわからないけれど。

とても優秀な騎士が敵の中にいて、とても目立ったのだということだけはわかった。

(だからといって宗教画の絵姿にある死神は無理があるわよね)

それではそのまま髑髏ではないか。さすがにおかしな話もいいところだ。

宗教画さながらの死神が鎧よろいを着て戦っている姿を思うと、少しだけおかしかった。

まあ、それを共有する相手もない部屋では、私が虚空を見て笑みを浮かべているようにしか見えなかったに違いない。

とりあえずはパトレイアが負けた。それだけわかれば十分だ。

(図書室に行くのも、暫しばしくは控しほえようかしら)

室内にある本だけでは少しばかり物足りないけれど、時間を潰すには十分だ。

日中は窓から眺める空と、庭がある。

日が暮れば、本を読む。

それともあえて出歩いて、機嫌の悪い貴族たちに「悪辣姫」が何かを企んでいるとまた陰口を叩かせて鬱憤を晴らさせてやれば少しは彼らの気分もよくなるだろうか？

(なんてね)

私の役割は、なんだろう？

ただ放置されて、嫌われる以外の役割が欲しい。

茫洋と部屋の中で過ごすだけでは、私は本当に民の血税を啜^{すす}るだけの、悪辣な、^ク姫だ。そう、思っていた。

突然国王夫妻が私の部屋を訪れるまでは。

『第四王女よ。そなたは来年の成人を機にデイノス王国へ嫁ぐことが決まった』

それは突然の宣告。

親が娘に告げる言葉にしては、ひどく硬いものだった。

『デイノス王国へは身一つで嫁ぐように。それまでに礼儀作法を今一度学び直し、あちらの国でパトレイアの姫として、侮られるようなことが何一つないよう心得よ』

『わたくしたちの願いはただ一つ、パトレイアの姫として恥ずかしくない振る舞いを期待します』

告げられる日程、それまでに準備を全て調べよとお言葉。

あまりにも慌ただしい来訪で、そして同じくらい慌ただしいお帰りだった。

大勢の部下を連れ、ただただ事務的に——いや、それが私たちの正しい関係なのかもしれない。

(……興^き入れか)

しんと静まりかえる部屋、まるで先ほどまでの出来事が幻のようだ。

「……アンナ、今、陛下たちが来られたのよね？」

「さようにございます」

部屋の隅で待機していた、私のたった一人の侍女が応える。

よかった、幻ではなかった。

「私、来年嫁ぐんですって」

「……はい」

「デイノス王国へ」

「……はい、姫様」

相手が誰かも教えてもらえないことはなく。事情を説明してもらえなくてもなく。

ただ、一方的に嫁げと命令されるとは……あまりの扱いに笑いが出そうだ。

(いいえ……いいえ、私は「悪辣姫」だものね)

これまで見聞きしたことで大体事情は察せた。

この国は頭を下げるために、王家の姫を差し出すのだ。

第一から第三王女まではずでに相手が決まっております、幸せな様子だ。

だから、残りもので——おまけで厄介者の「悪辣姫」が、ようやく役割を得たのだ。

望んでいた役割を得たことに、胸が少しだけ高鳴った。

そして同時にツキンとした痛みを覚える。

だってこの役割を演じるには、私を娶らねばならない犠牲者が必要なからだから。

(私の夫に選ばれるだなんて、お相手はなんて哀れな人なのかしら)

誰かも、それこそ名前すらも知らない未来の夫に同情する。

私に選択肢がないように、きつと相手にもそんなものはないのだ。

(でも……そうね)

少しでも学んでおこう。

いざという時の、役に立つように。

「アンナ、図書室からデイノス王国の本を持ってきてくれるかしら」

「かしこまりました」

これはきつと、良い機会だから。



(……あつという間の一年だったわ)

特別に授業があつたとか、嫁入り前にドレスを選ばせてもらうとか、そういったことはなかった。

一応、ドレスのサイズ合わせには呼ばれたけれども。

私が自分でしたことと言えば、デイノス王国の歴史書と貴族名鑑を眺めて過ごしたことくらい。

それだって最新のものかどうかは疑わしかったけれども。

(私が嫁いだモレル辺境伯家は、割と新しい家柄なのね……)

なんでも三代前の当主が大層な武人であつたそうだ。

未開拓の地が多く、獣退治も含めてパトレイア王国との小競り合いに対応できるだけの武力とカ

リスマ性を持つ騎士を取り立て配備したといったところだろう。

元々は王家に忠誠を誓う家の子息であったという。

その力関係が今も変わらず、王家に尽くす家柄……それがモレル辺境伯家だそうだ。

(……今夜、私はここにいってもいいのかしら)

式も結婚式と言うよりはただの調印式のようなだった。

神父の前で誓いの言葉を述べ、結婚に関する書類にサインをする。

そして会話もないまま、別々の馬車に乗りモレル辺境伯家に移動した。

その後もお披露目があるわけでもないし、家人を紹介されるでもない。

名も知らない侍女に言われるがままについて行って、ドレスを脱がされ初夜の準備としてお風呂と夜着の仕度を手伝ってもらった。

それらの準備を終えて案内された初夜の間で、私はぼんやりとベッドに座って新郎を待っている。すっぱかされる確率の方が高かろうと思いつつ、ただ一人でぼんやりと。

(侍女すら連れてこれられない、それが私)

そもそも自国でも侍女と執事が一人ずつしかいなかった。

どちらもパトレイア王国の人材で、私個人に忠誠を誓っていたわけではなかったから、連れて行くことは許されなかった。元々身一つで言われていたし。

それでも二人は『あんまりだ』と怒っていたけれど。

(懐かしいわ)

教育係の対応が酷くて替えて欲しいと願っていたら、妃殿下に叱られたことがあった。

言うことをまるで聞かないし、それどころか王家の権を振りかざして脅してきたと報告を受けたと、そう言われた。あんなに良い教育者を揃えてあげたのに、と。

他にも、侍女たちが用意したドレスがあまりにも強い原色の、ゴテゴテ飾り立てられたものしかなく、もっとシンプルで私の好きな色にして欲しいと願い出たら、今度は陛下に叱られた。

贅沢にドレスを欲しておいてまだよこせとはなんて強欲な娘だと、そう言われた。

反省しろと与えられた侍女と執事は一人ずつ。それがアンナとビフレスクだった。

『私は、何か悪いことをしたのかしら？』

『いいえ、姫様』

『決してそのようなことはございません』

二人だけは、私のことを否定しなかった。

何度も周囲に誤解だと訴えてくれた。それだけで嬉しかった。

気がつけば悪辣な姫なのだと言われ、世間では言われていて、それが真実とされていた。

誰もがそう囁くものだから、私たちの小さな声なんてあつという間にかき消されてしまった。

おかしい話だ、社交場に出ることすら嫌がられて一日の大半をほぼ自室で過ごしていたのに。

(……どこに行っても変わらない)

本当は……パトレイア王国を離れたら、何かが変わるのかと少しだけ期待をしていた。

けれど私はやっぱり「悪辣姫」で、夫となった人からすれば押し付けられた妻で、恋人を悲しませる非道な女なのだろう。

ぼんやりと、窓から見える月を見上げた。

(静かだわ)

遠くに、結婚式を祝うと称して楽しむ人々の声が聞こえる気がした。

結婚は幸せになるためのものだ、侍女のアンナは言っていた。

けれど私は王族だから義務でもあるのだと、執事のビブレスクは教えてくれた。

いずれにしても、新しく家族となつて二人で築き上げていくものなのだ。そう教わつた。

(……私には、無縁だ)

家族の愛情つて、なんだろうか。

家族になるつて、なんだかよくわからない。

(でも……)

空っぽの腹を撫でる。

ここに、命が宿るのかと思つたら、なんだか心がざわめいた。

ほんやりとそうしていたら無遠慮にドアが開く音が聞こえて、のろのろと視線を上げる。

そこには人影が一つ。誰かなんて、すぐにわかつた。

(……来てくれたの?)

思わず驚いて目を瞬かせ、座つたままは失礼だつたらうかと立ち上がつてお辞儀カウチンイをする。

するとどうしたことか、彼はどこか怯ひるんだ様子を見せたではないか。

だけれどすぐに気を取り直した様子でこちらに歩み寄つてきた彼は、眉間に皺しわを寄せて厳しい表情

情をしていた。何故かそれが、作り物に見えるのは私の気のせいだろうか？

「……ヘレナ姫」

「どうぞ、ヘレナと呼び捨てになさってください、旦那様」

「だんっ……ゴホン。初めて会ったばかり……！ いや、確かにその、わたしたちは婚儀を執り行ったのだから今日から正式な夫婦で、だが……」

「……？」

ブツブツと何かを言う彼の後ろで、侍女たちがそっとドアを閉めるのが見えた。

どうやら、一応初夜を行うつもりで彼は訪れたのだと私はそう理解したが、違うのだろうか。

「旦那様」

「なっ、なんだ！」

「初夜の儀の前に、お願いしたいことがございます」

愛されない、わかっているの。

期待もしない。絶すがつたりもしないから。

だから、どうせ、我が儘な悪辣姫あくらつひめと思われているのなら——どうか、一つだけ。

たった一つだけ、私の願いを聞いて欲しい。

その気持ちを込めて、彼を見つめる。

彼は少しだけ戸惑ったみただけで、私の目をしっかりと見返してくれた。

（こうして、目を見て誰かと言葉を交わすのは久しぶりだったかしら）

いつだって私の視界はベールを挟んだ、くすんだ世界。

でも今はそれも取り払われて、私を射るように見ている彼としっかりと目が合った。

（ああ、室内だと彼の目は黒にも見えるのね。不思議）

ステンドグラスの光に照らされていた時は、確かに紺青だったと思うのに。

明かりを控えめにしている室内だと、別の色に見えるから不思議だ。

「……願ひ、とは？」

「旦那様には以前よりお付き合ひされている恋人がいらっしゃると、耳にしております」

「……それは」

困ったように口を開いて何かを言いかけ、閉ざす旦那様。

政略的な結婚をしたばかりの新妻からそんな言葉が出るのは、とても煩^{わづ}わしいことだろう。

特に、なんとも思っていない女の口から恋しい女性について言及されるのは……きつと、とても嫌なことだと思ふ。

「私が敵国の王女である以上、旦那様にとつても私と子を生すことは義務でしょう。ですから提案があります」

そうだ、この結婚は和平の証。

子ができなければいずれば離婚もあり得るだろうけれど、その可能性は極めて低い。

基本的には子を生すことが前提の婚姻なのだ。そして、人質である私の価値がなくなるか、あるいはパトレイアが人質をとる価値すらない国だと思われるか……。

そうでもない限り、私の身の内に流れるパトレイア王家の血を手に入れることで、有事の際にデイノス王家はパトレイア王家の継承権を請求できる。

順位は関係ない。他国に干渉できるかどうか、それが大きな点なのだから。

この結婚は友好の証ではなく、パトレイアが屈した証。

だから私たちには、義務がある。

互いに、押し付けられた義務が。

「……聞こう」

「私に離れのような居を与えていただきたいのです。そして恋人という女性に本宅で暮らしていた
だければよいかと。そうなればお二人とも安心でございましょう」

「えっ……?」

私の提案に驚いたのか、眉間に皺を寄せていた表情から一転、目を丸くするそのお姿はなんだか
とても可愛らしい。

(男性に可愛らしいは失礼かしら。でも直接言うわけではない)

そしてその表情こそが、本当の彼の表情な気がする。

だとしたら、やはり相当私との結婚で苦勞をかけているのだろう。

「その上でお願いというのは……本来ならば白い結婚を申し込むべきであろうことは重々承知して
おります。ですが、私と子作りだけはしていただきたいのです。月に数度、日を決めてこうして共
寝をしていただけませんか」

「……な、何を言っているんだ……? 意味を理解しているのか!？」

私の言葉に、旦那様はとても困惑しているようだった。

ああ、もしかして私とその恋人を追い出せと迫ると考え、身構えていたのだろうか。

それともただ驚いただけなのか。私にはわからない。

世間から「悪辣姫」とまで呼ばれているような女が、そんな殊勝な提案をしてくるなど何か裏が

あると思ったか、それとも単純に予想外だったのか……いずれにせよ、当然の反応か。

「ご迷惑はおかけしませんわ。侍女を連れてきていないため、食事を運んでもらわねばならないのが申し訳ないですが……でも基本的なことは自分である程度はできますから、離れて暮らす許可さえいただければそれで。もちろん客人がおいでになる時は女主人として対応もいたします」

「……貴女は、それでいいのか……？」

「いいも何も」

戸惑うままに問うその声が思いの外、優しくして。

まるで私を案じているように聞こえ、そんな自分が情けなくて私は思わず笑ってしまった。ハツとして口元を押しさえる。

零れたのは自嘲の笑いだったのだけれど、これでは悪い印象を与えてしまったかもしれない。

ただでさえ旦那様の耳に届いていられるであろう悪評に加えてこれでは、話を聞いてもらうことすら危うくなってしまうのではないか。笑っている場合ではないと私は表情を引き締め改めて向き合う。

「私に、選択肢はないのでしょうか？」

「……！」

驚いて息を呑む旦那様に、私はもう言いたいことは全部言えたと目を伏せる。

交渉ごとなど初めての経験だ。

といつても、なにもかもが初めてだけれど。

結婚も、他国にすることも、侍女が一人もいないことも、誰かと視線を合わせて対等に会話することも……そう、なにもかも。

(そうよ、私は「悪辣姫」なんだから怯まなくてもいいのよ。堂々としていれば)

どうせ白い結婚を貰こうにもしばらくの間、周囲から私たちは監視されるに違いない。

目の前にいる夫の意向も関係なく、王家の息がかかった者がどこかにいるはずだ。

「田舎に嫁がされた」と「悪辣姫」が痲癩を起こして困るから、離れに幽閉した」とでも言っておけば、周囲は納得もいたしましょう」

「貴女は……」

「いずれ子を生じた後、あるいは子を宿せず三年を待つか……それはわかりませんが、なんにせよ国交が平常化してくれば、離婚も叶うかもしれせん」

「……ちょ、ちょっと待ってくれ……!」

「そうなれば、旦那様も晴れて恋しい方と縁を結び直すことができます。どうか、それまでの関係と思い、私に情けをいただければと思います」

言いたいことを言って、私は頭を下げる。

初夜にすべき話ではなかったかもしれない。

(だけど、私には今しかきつと機会がないはずだから)

旦那様はこの申し出にとっても戸惑っておられるようで、顔に手を当てて忙しくあちこちに視線を彷徨さまよわせている。

窓を見たり、時計を見たり、そして私を見ては何かを言いたそうにしながらまた口を嚙くんで。

なんだか、とても慌ただしい。相当、困惑させてしまったようだ。

しばらくそうしていた彼は大きなため息を吐いて、私を睨むように見つめた。

「……わかった。とりあえず、今日は初夜だ。本来ならば他国から嫁いできたばかりの貴女を信用できないから、むやみやたらと触れるわけにはいかない。が……それでもどこで誰が目を光らせているかわからない以上、この初夜で床を共にすることは……仕方のないことだ」

「はい」

「……仕方のないこと、なんだ」

おかしな話だ。

彼はまるで自分に言い聞かせるように、そう繰り返して……なんだか、私の方が悪いことをしているみたいになった。

だけど、閨むねでは夫に逆らうことなかれ。

国を発つ際に妃殿下の侍女がそう教えてくれたから、私は何も言わない。

旦那様の手が躊躇ためらいがちに伸ばされ、私を抱き寄せる。私はそつと目を瞑つぶった。

（ああ、他人の体温って……思っていたよりも、温かいのね）

初めて感じるその温もりは、いつか手放さなければいけないとわかっていても……何故だか、涙が出そうになるほど温かかった。



幕間

辺境伯は噂の花嫁に戸惑いを隠せない

悪辣姫。

その悪名は、隣国との国境にあるこの辺境地にもよく聞こえてくるものだった。

いわく、我が儘で気位が高く、少しでも自分の意見が通らなければ癩癩を起こし、手近にある物を投げつけては侍女たちにつつけて泣かせ憂さ晴らしをする。

いわく、その気性の荒さから王家の中でも鼻つまみ者とされ、まともな教育も受けていない。

いわく、好みの男を見かければ寝所に連れ込もうとするなど品性の欠片もない。

いわく、散財癖があり素行もよくないために王家から社交場に出ることを許されず、その姿は公行事でしか見られない。

いわく、常にベールを被っているのは醜さを隠すためで、美しい女全てを憎んでいる。

いわく、いわく、いわく……とにかく悪い噂しか聞こえない。

悪評は噂として誇張されている部分もあるのだろうが、王族がそこまで言われるなんてきつと何かしらの問題を抱えているに違いない。

少なくとも、揉み消せない程度には城内の人間たちに嫌われていたことは事実だろう。

でなければそんな噂が国外の人間にまで届くなんて、あり得ない話だ。

「……その、はずだったんだけどな……」

俺は、大きなため息を吐き出した。

悪名高き「悪辣姫」と結婚しなければならぬと決められた時、俺は絶望した。

なんでよりにもよって小競り合いの相手国の、しかも我が儘で癩癩持ちだと有名な末姫を妻に迎えずにえなくちゃならないのか！

領地内の反発を考えると頭が痛い。小競り合いとはいえ、モレル辺境伯家に仕える者たちの大半

あった際にはこの地が最前線になるという覚悟だ。

(見た目と家柄がいくら良くても、俺は華やかな暮らしも、王に認められることも望んでいない)
釣書を送りつけてくる連中が望むものを、俺は与えてやれないだろう。

辺境伯という地位に見合っただけの生活は送れるだろうが、俺は民に寄り添う生活を望んでいる。
そして俺は後ろで構えるのではなく前に出て行く領主なので、いつ何があってもおかしくない。

その行動から蛮族めいた男だの、浅はかな若造だのと好き勝手言う貴族たちが俺のことを裏で嘲笑っていることも知っているが……それでも俺は、剣を持って前に出たいと思う。

だからこそ、その気持ちを理解してくれる伴侶でなければ受け入れがたい。

そういう理由があるから普通の貴族令嬢ではなかなか決め手に欠けていて、苦手な領地経営に時間を割きたいから見合いをするのを面倒がった結果、ずるずると今に至るまで婚約者がいなかったわけだが……。

まさかそれが仇あだになると誰がわかっただろうか？

(くそ、あのクソジジイめ！)

今回のパトレイア王国との小競り合いのおかげで我が国が優位に立てたことは聞いている。国王がご機嫌な様子で、その立役者となった俺と辺境地の兵士たちを褒め称えてくれたからな。おかげで王子たちも仕事が増えたとかで嬉しい悲鳴をあげているようだ。

それを聞いたところで、せいぜい働けと思うだけだ。

安全なところでふんぞり返っている連中だ、こういう時こそ働いてもらわないとな！

まあ、それはどうでもいい。

正直俺からしてみれば、役目を果たしただけに過ぎない。

とはいえ国同士の話し合いの結果、多くの利益がこちらにもたらされると同時に、パトレイアとの約束事も増えたのは事実。

それによって小競り合いが減ってくれるなら、嬉しい限りだが……。

ただ、その約束の一つが『王女を人質として嫁がせること』であったこと。

そして問題はその王女が『悪辣姫』だったって点だ。

（婚約者のいないのがその姫だけなんだから、仕方がないっちゃ仕方がないんだが……）
残念なことに我が国には姫もいないし、いたとしても嫁がせる意味もないしな。

次代の王を産むという形で王太子に娶らせるのは悪い手ではないのだろうが、斜陽の国を狙う理由にはならないらしい。そのあたりについてはよくわからない。

それでもパトレイア王国を含めた他国に対する牽制の意味で、人質は必要なのだという。

しかし悪名高き『悪辣姫』を王家に迎えるのは面倒だと考えたのだ。

つまり、国王は自分たちの息子に厄介な女をあてがうつもりはさらさらない。

かといって高位貴族でなくばディノス王国としても外聞が悪い。

そこで辺境伯という地位にありパトレイア王国との縁もあるとして、ちょうど婚約者のいなかった俺に白羽の矢を立てたのだ。コノヤロウ。

（縁は縁でも悪縁だろうが！）

王命は覆せない。

だからといって唯々諾々と従うには業腹だ。

少しばかりやり方がせこいとは思ったものの、こちらも手を打つことにした。

部下とも話し合って俺には以前から親しくしている女性がいて、この婚姻が不本意であるという噂を流しておいたのだ。

傲慢で癩癩持ちだという「悪辣姫」なら、きつとこの噂と俺の部下たちの対応で怒りに身を任せて碌ろくでもない行動をとってくれるだろう。

それを理由に遠ざけることもできるだろうし、上手く行けばあちらから離縁を切り出してもらえ
るかもしれない。こちらから離婚を申し出ることは難しいはずだから。

法に基づいて申請はできるだろうが、あの王家のクソジジイが許すとは思えない。
嫌われるのが一番だ。

幸い聞こえてきた噂によれば、かの「悪辣姫」の好みは金の髪に細身の優男だという。
不幸中の幸いなことに、その特徴は俺と真逆だ。

きつとこのやり方で間違いはないと胸を撫で下ろしたものだだった。
(なのに、なんで……)

結婚式には、わざと遅れて行った。
本来は失礼極まりない行動だが、怒らせるためだけにやった。嫌われるために。

なのに彼女は怒ることも何もせず、侍女を一人だけなら連れてくることを許すなどといったこ
らの傲慢な態度にさえ文句を言うでもなく、ただただ静かだった。

替え玉じゃないのかと部下たちも思わず零すほど、静かな人だ。

さすがにそれははないということにはわかっている。パトレイア王国側が妙な真似をしないよう、結

婚式が行われる教会までデイノスの兵が彼女を護衛してきたのだ。

(じゃあ、あの噂はなんだってんだ?)

初夜の儀も正直すっぱかしたいところではあったが、デイノス王家からの間諜に監視されている可能性があることから、無視はできない状況だ。

だが彼女を怒らせるために『愛せない』とわざわざ宣言しに行くことは、俺にとつてとても気の滅入ることなのだ。

嫌われるためとはいえ、傷つけなければならぬことを好む人間はいないだろう。

(……結局、俺は何一つ言えなかったな……)

愛せないと、他に大事な女がいると宣言して、閨も共にしないと言えば痲癩を起こしてくれるだろうと思っていた。

だが言い出せずにおたおたしてしまい、変に思われなかっただろうか。

(元来、俺は嘘が苦手なんだ)

しかも部屋に入るなり彼女の方からあれこれと提案されて、俺は目を丸くするばかりだった。

噂とはまるで違う、どこか浮世離れた静かな雰囲気たたを湛えた女性。

プラチナブロンドの長いさらりとした髪に、静謐な、紫の色が強い青の瞳。神秘的だった。

苛烈で痲癩持ちだという噂なのに、彼女は静かに、ただただ静かにそこにいた。

(綺麗だった)

まるで精巧に作られた人形のような美だと思つて、らしくなく見惚れた自分を思い出して笑いそうなくらいだ。だが、それほどまでに彼女は美しい。

(誰だ醜いなんて噂流しやがったやつ)

そもそも、侍女を一人も連れてこなかっただなんて、それだけで驚きだ。

確かにこちらから申し出たことだが、それだつて一人は許可したんだ。

あくまで間諜を紛れ込ませられては困るという名目で、モレル辺境伯家に来た際にはきちんと教育を施した使用人をつけるつもりだった。

だが普通ならば徹底した嫌がらせとしか受け取れないであろうその項目に、あちらの王家がすんなりサインをしたつていうからさらに驚きだ。

いくら王族の義務がどうのこうのとあるからつて、娘が可愛くないのかと呆れたのだが……実際に目にした彼女に、俺は戸惑うばかりだった。

まさか侍女を一人もつけてもらえていないなんて！

(しかも自分から離れに住まうと言い出した。……何を考えている?)

やはり替え玉なのだろうかと疑ってしまうが、それはないとどの部下も答える。

そうなると、そもそも噂が疑わしい。

第一に気になったのは、彼女が本当に浪費家なのかという点だ。

豪奢な暮らしをしていたと言う割に、彼女が持ってきた嫁入り道具はあまりにも少なかった。

この結婚の意味を考えれば、嫁ぎ先にあれこれと要求できる立場ではないだろうし、歓迎されるなんて思えない。そのことを踏まえて、ある程度の荷物を持ってきてもおかしくないはずだ。

(なんだか不自然なんだよ……)

それに、社交界に出ることもなかったというのに浪費したという品々はどこに消えたのか。

まあそれは王家側の意向で持ち出させなかったとも考えられるが……。

(パトレイアでは我が儘が過ぎたせいで侍女も最低限しかつけられていなかったという話だが、それならどうやって買い物をしていったんだ?)

話しぶりは淡々としていたが、痲癩わきまのかの字もなかったではないか。

むしろあの落ち着きぶり、自身の立場を弁わきまえた上でこちらを慮おもんばかる姿には恐れ入る。

あの姿がもしも本当の彼女だとしたなら。

(俺は、何か過ちを犯していないだろうか)

「……アレン。アレンデール、考え込んでどうした?」

「イザヤ。悪いが今すぐ調べて欲しいことがある」

「おっと……どうしたんだよ。さつきから本当におかしいぜ?」

「妻になった彼女のことを調べたい。あまりにもおかしな点が多い。それから離れを用意して、彼女をそこに住まわせて気づかれないように監視しろ。……女性監視員を侍女に化けさせて、定期的に接触させてくれ」

「例の『悪辣姫』についてか? なんかおかしいってのか?」

「ああ、おかしいなんでもんじゃない」

俺は腹心であるイザヤに、これまでのことを話した。

初夜には俺からガツンと言ってやるつもりが、出鼻を挫くじかれたこと。

その内容が、あまりにも……なんというか、俺の『架空の恋人』を思いやるような言葉ばかりであったこと。

それが演技だとすれば、何の目的があつてのことなのか……あちらの王家の意向なのか？
いずれにせよ、俺はまだ、彼女のことを何も知らないとそう痛感させられたのだ。

結婚式を挙げて、あえて客間に通した彼女とまさかの一夜を共にした。

それも定期的に共に過ごす約束までしてしまった。

だが、そうだ。

もしも俺の勘が正しければ？

(……そうなら、彼女は正当な権利をもって辺境伯夫人としての暮らしを享受するべきだ)

俺は、嘘が苦手だ。

だから本当のことを、知りたいと思った。



幕間

あの子の好きなもの

パトレイア王国の第一王女トーラと第二王女ミネアは共に国内貴族に嫁いだこともあり、よく顔を合わせていた。

元より一つしか歳が変わらない彼女たちはとても仲が良い。

「こうして一緒にのんびりお茶が飲めるようになってホッとしたわ」

「一時はデイノス王国との戦争になるかと思つたものね……」

両親である国王夫妻からも可愛がられて育つた彼女たちは、嫁いだ後も夫にも愛され幸せな結婚

生活を送っている。

とはいえ彼女たちが幸せな生活ができるのは、長男であるマリウスが生まれたおかげでもあった。それまでは第一王女であったトーラが、王太女として婚を取る方向であったのだ。

トーラ誕生の翌年、第二王女のミネアが生まれた。女児だったので、継承権は変わらなかった。更にその翌年、第三王女のサマンサが生まれた。やはり継承権は変わらなかった。

公爵家から次男を婚に取る話になつてはいたが、トーラはずっと公爵家嫡男のことを好いていた。彼もまたトーラのことを憎からず思っていたが互いの立場を考えれば諦めるしかない。

そんな中で第三王女の誕生から二年後。

両親が、国が切望していた、男児——マリウスが生まれたのだ。

可愛らしい双子の赤ん坊を見て、家族は誰もが喜んだ。

特に、待ちに待った男児であるマリウスは、より輝いて見えたものである。

(この子はパトレイアにとって、希望となるだろう)

少なくともトーラはそう信じた。

こうして第一王女は王太女から外れ、望んでいた公爵家嫡男と無事に結ばれた。

同時に第二王女であるミネアも婚約者が決まった。

彼女はそれまで王太女に万が一の際の役割を担っていたために、婚約者を定められなかったのだがマリウスの誕生と共にその役目から外れることが許された。

しかも彼女が密かに想いを寄せていた騎士団長と婚約することが許されたのである。

そして第三王女のサマンサは、留学してきた隣国の王太子に見初められての輿入れだ。

どこまでも幸せな空気がパトレイア王国を満たしていくことに、王家の間も、そして国民も酔いしれたものであった。

マリウスが生まれてから、国王夫妻が育児に積極的になった。

そのためトーラもミネアも育児にかかりきりとなった両親に代わって執務に追われ、多忙を極めた。それでも自分の望む結婚ができるのだからと、彼女たちは喜んで手伝ったものだ。

地方への視察も国王に代わり行ったし、祭事も王族が担えるものは率先して彼女たちが行った。全ては自分たちを王族の縛りから解放してくれた弟のためだった。

そうして弟が両親の手によって立派な王太子となった頃、彼女たちは嫁いだのである。

それからは王室の仕事を手伝いつつも夫を支え、高位貴族たちを取り仕切りながら時々こうして息抜きに、姉妹だけのお茶会を楽しんでいるのだ。

「そういえばミネア、貴女のところにもお母様から連絡が来たのではなくて？」

「ええ、そのことでお姉様に相談しようと思っ……」

「あら。貴女も？ わたくしも貴女に相談しようと思っ……だからちようどいいわ！」

つい最近、王太子の双子の片割れ、末の妹である第四王女が嫁いで行った。

あまり関係性の良くない隣国ディオスの、辺境伯の妻となったのだ。

両国の小競り合いによって戦争にまで発展しそうなほど険悪になった関係を改めるために決められた婚姻とはいえ、末の妹がそのようなことになって姉二人の胸は痛むばかりだ。

だがこれも王族の定め、自分たちはたまたま好いた人と結ばれるという幸運に恵まれたが、一歩

違っていれば妹ではなく自分たちがそうなったであろうことは彼女たちも理解している。

王家の女として、彼女たちはただ妹を励まし送り出すだけしかできなかった。

それも直接だと派閥の関係やディノス王国の人間に勘繰られるといけないので、手紙でたったのだけれども。末の妹の負担にならないよう、返事は不要と記したのはせめてもの気遣いだ。

状況が状況だけに盛大な結婚式は挙げられないし、王族に連なる者は参列できないと国王夫妻から言われていたため、そのくらいしかなかったのだ。

特に外交を担う公爵家と、国防を担う騎士団長であるそれぞれの夫から『今件の小競り合いは全面的に我が国が悪かったから仕方ない』というような話を耳にしていたので、王族としての縛りから抜け出せなかった四番目の妹を大層哀れに思ったものだ。

だからこそ、下手に口出しして逆に妹の立場がなくなっては申し訳ない。

持ち物も最低限しか許されず、花婿ではなく兵士が迎えに来るなど屈辱だったろうに！

「辺境地であの子が体調を崩したとかで、あちらからあの子の好む物を教えて欲しいと連絡が来たんですってね。大丈夫かしら……あの子、王城の外にすら行ったことがなかったもの」

「そうね、案外大切にされているようでホッとしたわ。……でも、どうしてディノス王国もそんなことを私たちに聞くのかしら。連れて行ったあの子の侍女に聞けば早いでしょうに」

「それがね、お母様ったら侍女を連れて行くことを許さなかったんですって！」

「まあ！」

「なんでもほら、嫁ぎ先がパトレイアと隣接する辺境伯家だったでしょう？ それで連れてくる人間は一人だけって条件をつけられたそうなのだけど、お母様ったら取り乱していたらしくて……あ

の子を一人で行かせたそうなのよ」

母親を非難するような言葉を発したミネアに、トーラは驚きを隠せない。

その驚きはミネアに対してではない。母親に対してだ。そしてそれは、ごくごく普通のことだと
言えた。他国に嫁ぐ王女であるのに、侍女の一人もつけずに送り出す王妃がどこにいるというのだ。
まさかそんな愚かなことをしたのが自分たちの母親だとは！

自分たちは王家から出た身だからと見送りすら許されなかったのだが、それでもたった一人で敵
国に人質として嫁ぐこととなった妹のことを思えば彼女たちが憤るのも仕方のないことであった。
「まあそれはともかく、お見舞いの品を贈るようにとお母様が言ってきたのだけれど……お姉様、
もしかして品物を指定されたのではなくて？」

「ええ、わたくしには、あの子の好むお菓子よ。貴女は？」

「こちらは、あの子の好む花よ」

二人は気づかない。

彼女たちの茶会に夫たちも同席していたのだが、彼らが怪訝そうに顔を見合わせていることに。

そんな夫たちの様子に気がつくこともなく彼女たちは同時にため息を吐き、そして同時に口を開
いた。

「ねえ、あなた。あの子の好きな（花）（お菓子）って何か知っている？」

その言葉に、姉妹は同時に目を丸くして顔を見合わせる。

彼女たちの夫もまた、目を丸くした。

「あらやだ、お姉様もご存じないの？」

「いやだ、貴女の方が妹たちと接する機会が多いと思って……」

互いに困惑する彼女たちに、騎士団長がそろりと公爵に目を向ける。

その視線を受けて、公爵は気まずい気持ちを抱えつつ口を開いた。

「そもそも」

そこできやく、姉妹はそれぞれ自分の夫が困惑した表情を浮かべていることに気がついて首を傾げた。いったいどうしたのかという顔で自分たちを見る妻に、男たちもまた困惑を深める。

「……きみたちは、どうして妹のことを『あの子』と呼ぶんだ？ ずっとそうだ」

「妹姫の名を知らぬわけでもあるまいに……」

その言葉に、姉妹はパッと顔を見合わせる。

そして言われたその内容に、そんなことはないと言おうとして自分たちの発言を振り返り、ハッとした様子で口元を押さえた。

おかしな話だ。どうして気づかなかったのか。

へい、最後に言葉を交わしたのはいつだった？

あの子が笑った顔を思い出せるだろうか？

どんな顔をしていただろうか？

それすら思い出せない姉妹は、顔色をなくした。

彼女たちはきやく自分たちが末の妹について何も知らない、知ろうとしていなかったことに気づいたのだ。

これまで家族として平等に接してきたと彼女たちは思っていた。

すぐ下の妹の好みも、弟の好みも把握しているのだ。末の妹のことだけ、わからない。

どうして、末の妹に関してだけ思い出せないのか。知らないはずなんてないのに。

(どうして?)

サマンサとマリウスの好みはこんなにもすぐ思い出せるのに。

過ごした時間はどちらも同じ程度だったはずだと、トーラもミネアも考える。

「お母様から聞いて知っていたつもりだったわ」

「……もしかして、マリウスに関しても実はわたくしたちは何も知らない……?」

家族に対して、自分たちは誠実だと信じていた姉妹は愕然とする。

彼女たちは、彼女たち自身で双子の弟妹たちにどう接していたのかも、そして、大切だと思っていたはずの弟妹たちから自分たちがどんな風に呼ばれていたかとも思い出せない。

その事実にも、知らず知らず体が震えた。

思わず夫たちに縋ったが、頼りの夫たちもどうしていいかわからない表情を浮かべている。

唐突に突きつけられた現実にも、彼女たちはただ震えるしかできない無力感を知ったのだった。



そしてその頃、王城では姉妹がそんな風になっていることなど露知らず、パトレイア王国の王妃、ユージェニーは困惑の表情を浮かべて目の前の侍女と話をしていた。

周りに他の者はおらず、王妃の態度から二人の親密さが窺える。

だがそれは気安い者同士が談笑を交わすというような空気ではない。

「アンナ、貴方をあの子から引き離したのは悪かったと思っっているのよ？ 確かにあの子に侍女をつけずに送り出してしまったのはわたくしの不手際だったわ。陛下にもお叱りを受けたの」

「……さようですか」

「しかし今から人をやるというのもあちらの国にしてみれば良い気分ではないだろうし、あの子は辺境伯の妻として大切にされているみたいだし……幸いにも夫君となった辺境伯は、妻の体調が優れないからと気を遣ってくださる優しい方のようによ？ 喜ばしいことじゃない！」

「……さようですか」

王妃が必死に侍女に語りかけるといふ光景は、なんとも不思議なものであった。

しかしそれは二人の關係に理由があった。

パトレイア王国の王妃ユージェニーとその侍女アンナは、乳姉妹だ。

ユージェニーの生家である侯爵家は男児が多く生まれることで有名で、彼女の上には兄が三人いる。唯一の娘として彼女はもう大切に大切に、それこそ蝶よ花よと育てられた。

そんな彼女の傍らには、乳母の娘であるアンナが常にいた。

乳姉妹であるアンナと、優しい兄たちや家族に囲まれ、侯爵令嬢として周囲に尊重され、王家にも望まれ……ユージェニーの人生はまさしく人が羨むような、順風満帆そのものだ。

その上、政略結婚をした相手は誠実で、夫となる人にも恵まれたと彼女は幸せであった。しかも婚儀を挙げてすぐ、一年も経たずに懐妊したのだ。

めでたいことだと当時王太子であった夫も飛び上がる勢いで喜んだ。

性別など関係ない、まずは健やかな子であってくれればそれでいい。夫婦でそう願った。

そうした幸せの中で生まれた長子は、女児だった。

まるまるとしたその子の健やかさに、誰もが喜んだ。

王太子夫妻は、娘を慈しんだ。その姿を見て誰もが笑顔になった。

夫婦仲は大変よく、程なくして第二子が宿った。

第二子である女児が生まれた時も喜びに満ちたが、直後に悲しみが国中を覆う。

当時の国王が突然病に倒れ、そのまま崩御したからである。

とても国民に愛された王だった。王太子夫妻も悲しみに暮れた。

そして王太子夫妻は新国王と、王妃となった。先王の突然の死に民の悲しみは深く、そして先王が優れた王であったがゆえに彼らに向けられる期待は大きく、重くのし掛かるようであった。

これまでも王太子とその妻として公務はあった。

常日頃から政務に追われ忙しくしていたし、先代の王妃は早くに亡くなっていたためその分の公務も彼らが担っていた。

王の補佐をし、十二分に国政を理解していると思っていた彼らは、国王夫妻としてより忙しくなった。民と、重臣たちが見ているのだ。

何かあれば先代と比べられることに苦笑しつつ、臣民の期待に応えるのは骨が折れる。

期待されれば、その次を求められる。終わりのない日々の始まりでもあった。

そこに『次こそ男児を』と望む声が大きくなる中、ユージェニーが第三子を宿した。

王妃として今度こそはと彼女も意気込んだ。

だが生まれたのは、とても美しい女の赤ん坊だった。

そのユージェニーの落胆に寄り添ってくれたのは、アンナだった。

アンナは常にユージェニーの隣にいて、彼女のことを王妃としてではなく乳姉妹として、ずっと陰から支えてくれていた、それにどれほど救われたことか。

ユージェニーにとって、アンナはとても、とても大切な人間であった。

「ね、アンナ。もっとうい加減に機嫌を直してちょうだい！ 貴女を信頼しているからこそ、あの子につけたのだし……今からでもあの子の元に行きたいと言ってくれるその気持ちは嬉しいけれど、それは状況的に厳しいのよ。わかってくれるわよね？」

「わたくしの言葉など、妃殿下には届きませぬでしょう。あの方に寄り添って欲しいとあれだけわたくしが申し上げても、聞き入れてはくださらなかったではありませんか」

「もう、アンナ、どうしてそんな……」

「どうしてと仰るのですか？ 今更になつて？」

フツと冷たく鼻で笑いながら目も合わせない乳姉妹に、ユージェニーは怯んだ。

いったいこの乳姉妹はいつから自分に対してこんなに冷たい態度をとるようになったのか、彼女には皆目見当がつかなかったからだ。

末娘の嫁ぎ先に自分の勘違いでついて行かせられなかったことや、現状を鑑みて向かわせることができない今の状況に不満を抱いているとばかり思っていたが、そうではないとようやく気づく。

そういえば末娘が嫁ぐまで、彼女と話をする機会もなかったような気がする。

ユージェニーの元に戻ってきてからずっと、何を言おうと反応が薄く、態度がおかしかった。

(いったい、どうして?)

サマンサを産んだ頃は、実家の侯爵家にいた頃と同じように親しかったはずだ。ではその後か。そうになると、双子を出産してからか。

ユージェニーはアンナの態度に動揺しつつも、原因を探るべく記憶を辿る。

第四子に待望の男児が生まれた。それに続けて、第五子に女兒も。

可愛らしい双子だった。

誰もが望んだのは、男児の方だった。生まれながらに王太子として生まれた長男。

出産で疲れ果てたユージェニーの目には、マリウスの存在がなによりも輝いて見えた。

この子は何を置いても守らねばならない。望まれた子だ。

ユージェニーにとって、もう続けての出産は厳しいと感じ始めていただけに嬉しかった。

(あの子はきつと、わたくしのために来てくれた子なのよ)

元より一夫一妻制の国だ。簡単には側室を迎えることもできないし、したくない。

だから期待に込めてくれるように生まれてきたマリウスが、いっとう愛しく感じた。

別にもう一人の子に対して、何か思うところがあるわけではない。

ただ我が子とはいえ、男児に対して思い入れがあったからどうしても少し、差が出ただけだ。

(アンナには、もう少しだけ双子を平等に扱うべきだと苦言を呈されたこともあったわね……)

だが王妃の立場から見ると、たった一人の王太子になるべき王子と、言い方は悪いがすでに上に

三人いる姫は平等ではないと思うのだ。

少なくとも、ユージェニーの中ではそうだった。

なにより、マリウスの誕生によって全てが上手く行き始めたのだ。

それまで宙ぶらりんだった長女と次女の婚約がまとまった。それもあの子たちが好意を寄せている相手とだ。しかもそれが筆頭公爵家と騎士団長とくれば、後ろ盾としても遜色ない。

三女は美しさもあって心配せずとも引く手数多であるし、普段は王室に対して良い感情を抱いていない貴族たちまでもが男児の誕生で王室は盤石であると認識し、従うようになった。

待ち望んだ男児は、ユージェニーだけでなくみんなに幸せを運んできてくれたのだ。

それに反するように、末の娘は誰からも疎まれた。

古い言い伝えを信じる人々からすると双子は不吉。しかも片割れがめでたき男児だったからこそ末娘は不吉の証のように見られてしまったのかもしれない。

もとよりユージェニーは、そのようなことを信じてなどいなかった。当然のことだ。

双子はどちらも彼女にとって愛しい我が子。

ただ、彼女は王妃として息子の教育に力を入れなければならなかった。

そのため、末の娘には目が行き届かなかったと言わざるを得ない。そのことについては申し訳ないとユージェニーも思っているが、それでも当時はどうしようもなかったことだ。

だからこそ、彼女の乳姉妹であるアンナを末娘の侍女にしたのだ。

せめてもの母としての愛だった。

「でもね、あの子はこれまで我が儘だったじゃない。だから仕方のないことだったのよ」

長男に比べると、四女はどうしようもなかった。

双子で生まれてしまったからこそ、余計に目についたとも言えた。

少なくとも、ユージェニーにとってはそうだ。

完璧な王太子と、不出来な第四王女。

人々が比べれば比べるほどに、母としてどうしてよいのかユージェニーにはわからなかったのだ。どうしてこうなったのだろうか？と何度頭を痛めたことか！

「妃殿下には、何も響きませんでしょう」

乳姉妹であるアンナを、ユージェニーは誰よりも信頼していた。

当時、娘の教育について頭を悩ませていたことをアンナは知っているはずだからと頼りにした。頼り切りにしてしまったことについては、反省している。

だからといってそこまで非難されることだろうか。

ユージェニーはグツと胸の内を高まる不満を噛み殺すように、唇を引き結ぶ。

(…確かに、アンナからの進言を適当に流してしまった咎は、わたくしにある)

アンナからは報告がいくつもあがってきたが、彼女が傍にいれば大丈夫…そう軽く捉えて、当面そのままと侍女頭に言っているうちにアンナが姿を見せることはなくなっていた。

少しだけ気がかりではあったけれど、王妃として、ユージェニーはとにかく忙しかった。

第一王女と第二王女の結婚式、外交、国内の問題。

国内貴族たちの派閥を取りまとめるための社交、それから寄付や施設を巡る慈善事業。

当然のことだが、国王の補佐だとしてしなければならぬ。

王子を産むだけが王妃の務めではないのだ。

男児を産んだ誉れ高き王妃、ではなく、賢妃と呼ばれるべく彼女は奮闘していた。

娘たちが、できる限り手伝ってくれたのが救いだった。そのくらい忙しかった。

第三王女が隣国の王太子に望まれて、そちらの教育も併せて行わなければならなかった。隣国に嫁がせて、教育が足りないなどと言われぬように。

もちろん、次期国王たる息子にも多くのことを望んだ。

だからこそ、マリウスには母親としてもできる限り寄り添った。

(全ては、パトレイア王国のためなのよ)

だがそんなユーージェニーの気持ちとは裏腹に、上手く行かないのが第四王女の存在だった。

多くの侍女をつけ、侍従をつけ、必要なだけのものは揃えたはずなのに届く報告は悪いものばかり。ただでさえ忙しい中でそんな話しか聞こえてこないというのに、愛情を保つのは難しい。

「だってそうでしょ!? やれ教師を替えろだの、ドレスを買い換えろだの……! 他の子たちはそんなことがなかったというのに、あの子だけ! 王女なのだから我が儘は控えさせねばならない、あれは躰だったのよ?」

そうだ、ユーージェニーは別に末娘を無視していたわけではない。直接育てていないだけだ。

他の王女と同じくして教育を施し、ドレスだって与えてきた。

王妃として忙しかったので直接それらを確認しに行ったことはないが、それでも他の子どもたちと遜色ないだけの扱いをするよう告げておいたはずだ。

それなのに不満を言うのは、おそらく構って欲しいあまりの幼い行動だったのだろう。

だとすれば末娘のことを哀れに思うが、ユーージェニーは王妃として、娘には立派な王女になつてもらいたいからこそ毅然とした態度をとったつもりだった。

しかし、アンナはそんなユージェニーに冷たい一瞥をくれるだけだ。

「わたくしの目から見れば、あれはただの虐待でございました。ゆえに、何度となく妃殿下にお目通りを願ひ、そして嘆願書を送らせていただきましたが、一顧だにしていただけなかつたようで。

そのことが今回のお言葉で、よくわかりました」

「……えっ？ アンナ？」

「妃殿下はこのアンナを信頼してくださっていた、そう思っております。そう、信じておりました。……ですが違つたようですね」

大切な乳姉妹の目が、もはやなんの情も宿していないことによろやくユージェニーは気づいた。冷たいなんてものではない、ただの空虚だ。

「わたくしがあの御方に同行することを阻んでいらしたのは他でもない、妃殿下であることはすでに侍女頭から伺っております」

「そ、それは……他の侍女をつけてあげるつもりだったのよ！ でも侍女は一人もと文官が読み間違えて！」

「弁明は結構です。つまり、妃殿下はご息女の結婚に関する書類も直接確認なさつておられず、わたくしの願ひを退け、知らぬ振りを続けておられた。それが全てにございましょう」

四女を嫁がせる際に、あの子には『アンナだけでも連れて行けないだろうか』と相談されたことをユージェニーは黙っていた。

それは王女の我が儘だと、そう思つたのだ。あの時は。

嫁ぐにあつたての人員、荷物、それらについての指示責任者は王妃とこの国では定められている。

だから王妃として指示を出した。それだけだ。

それがどう間違つて、侍女の一人もつけずに……なんてことになったのかはわからないが、書類を確認する文官に誤りがあったとしかユージェニーには言いようもなかった。

失態には違いないと非難については甘んじて受け入れるつもりだが、それでもユージェニーは自身を王妃としての責任はまっとうしていると自負していた。

(あくまで、王妃としての立場を貫いただけなのに……どうして伝わらないのかしら)

ユージェニーだつて親友で、姉妹同然のアンナにそろそろ戻つてもらつて話を聞いてもらいたかつたというのに。まさか末娘が連れて行きたいと言ひ出すとは思ひもよらなかつたのだ。

アンナに甘えるばかりの我が儘娘だと、あの時は腹が立つて許せなかつた。

狭量だと言われればその通りであつた。

隣国との小競り合い、責任、賠償、その他諸々……王妃として日々対応に追われるあまりに少々嫁ぐ娘をぞんざいに扱つたことは彼女も認め、反省している。

(アンナはきつと、長くあの子の傍にいたから情があるんだわ。優しいものね)

ユージェニーは手に持っていた扇子をグツと握りしめ、精一杯の朗らかな笑みを浮かべる。

かつて互いになんでも言い合っていた頃をアンナに思い出してもらいたくて。

「な、何も意地悪がしなかつたわけじゃないの。あの子つたらアンナを親代わりに思つていたでしょうし、それなら親離れも必要でしょう……? これは良い機会だと思つて……」

「妃殿下。あの方の名前を、覚えておいでですか」

「……え?」

アンナに問われ、ユージェニーは咄嗟に声が出なかった。

すぐに末娘の名を問われていると気づき、ヘレナ、だと言おうとしたが、上手く声が出なかった。何故だか、自信が持てなかったのだ。

名付けは、夫である国王が行った。

その名を聞いて、彼女も賛成した。だから、当然知っている。

だけれど記憶にあるその名前前で本当に正しいのか、自信が持てなかったのだ。

そんなユージェニーの姿を見て、アンナは小さく息を吐き、頭を下げる。

「このように反抗的な侍女はパトレリアを代表する貴婦人の傍らに値しません。どうぞ、暇いとまをいただけますよう」

出て行くアンナを呼び止めたかったのに、ユージェニーは何も言えなかった。

ただ伸ばした手だけが行き場を失い彷徨って、そして力を失ってだらりと垂れる。

(どこかで何かを間違えてしまった。そんな気がする)

乳姉妹に突き放されてようやくそれに思い至ったが、どうしていいのか彼女にはまるでわからなかったのだ。



第二章 幸せな離れ暮らし

旦那様は、どうやらとても誠実な方らしい。